



こんにちは、
岐教事です！

岐阜教育事務所だより
1月号 (No. 10)
平成30年1月17日発行

児童生徒科学・社会科課題追究学習作品について

平成29年度岐阜地区児童生徒科学・社会科作品取組状況

学校	科学作品取組人数	社会科課題追究学習作品取組人数
小学校	3,790人	929人
中学校	804人	520人
小・中学校合計	4,594人	1,449人

【取組の様子】

校種	科学作品	社会科課題追究学習作品
小学校	<p><低学年></p> <ul style="list-style-type: none"> 実験前に予想を立てたり、実験の手順を考えたりする研究が多く見られました。また、条件を統一して、確かな実験方法と結果から考察した作品が多く見られました。 <p><中学年></p> <ul style="list-style-type: none"> 何度も実験を繰り返して平均を求めたり、素材を変えて実験をしたりと、豊富なデータから考察し、一般化しようとする作品が多く見られました。 <p><高学年></p> <ul style="list-style-type: none"> 予想外の結果が出た時、その原因を考え、条件を整えたり変えたりして再度試みたり、自力で解決できないことは、現地や専門家を訪ねて考えをより確かなものにしたりとしようとする作品が見られました。 	<p><低学年></p> <ul style="list-style-type: none"> 日常生活や生活科での学習をきっかけに、給食や地域の祭り、マンホールや郵便等、身近な生活事象に目を向けて課題を設定した作品が多く見られました。 <p><中学年></p> <ul style="list-style-type: none"> 社会科の学習や日常生活で疑問に感じたことをきっかけとして課題を設定し、体験活動や調べ学習を通して追究する作品が多く見られました。 <p><高学年></p> <ul style="list-style-type: none"> 自分自身の興味・関心をもとに、より広く深く追究したり、県全体や国全体に視野を広げ幅広い分野の中から課題を設定したりしている作品が見られました。
中学校	<p><中学校></p> <ul style="list-style-type: none"> 実験データの正確性を高めるために、予備実験を行うことや回数を多く実験すること、撮影した映像を編集し分析する等、実験方法や検証方法に工夫が見られました。 	<p><中学校></p> <ul style="list-style-type: none"> 社会科の学習で関心をもった内容や、社会の中にある福祉や防災の必要性、国際平等の今日的な課題について、社会的な見方・考え方を働かせて追究した作品が多く見られました。



今年度も、夏季休業を中心に取り組んだ児童生徒科学作品展、社会科課題追究学習作品展が各学校等で行われました。県全体では、科学作品に15,423点、社会科課題追究学習作品に2,970点の応募がありました（岐阜地区は左表の通り）。

その中でも優れた作品が昨年の10月28、29日に岐阜県図書館で展示されました。

「科学の甲子園ジュニア」岐阜県大会の結果

昨年の9月30日、岐阜大学において、科学好きの裾野を広げ、未知の分野に挑戦する探究心や創造性に優れた人材を育成することを目的とした「科学の甲子園ジュニア」岐阜県大会が開催されました。

岐阜地区からは、岐阜市立長良中学校B、岐阜市立東長良中学校B、各務原市立中央中学校、瑞穂市立穂積北中学校の4チームが予選を通過し、本大会に参加しました。

ものづくりの能力、コミュニケーション能力等を用いて課題を解決する力を競う実技競技に挑み、岐阜市立長良中学校Bは準優勝、瑞穂市立穂積北中学校は第3位、岐阜市立東長良中学校Bと各務原市立中央中学校は奨励賞という結果でした。

偉人たちの生き方が示しているように、多様な才能が開花するきっかけはどこにあるか分かりません。作品展も科学の甲子園ジュニアも、子どもたちの可能性の芽を大きく育てるきっかけとして、積極的に挑戦していただければと思います。

きれい!と光る すてきな実践を紹介します!

児童生徒が話
したいことを
取り上げる

英語科編



中学校第1学年の授業で、「岐阜市のお勧めの場所を初めて訪問する外国人に伝えよう」とテーマが出ると、生徒は一斉に英語で「見ると楽しい物」等を視点として、話し始めました。このように、自分で話す内容を考え、既習表現のどれがよいかを判断し、実際に話すことで即興性が養われます。

また、この言語活動後に、「Do you have any questions?」と先生が生徒の困り事を聞きました。ある生徒が『澄んでいる』はどう言うの?と尋ねると、周りから「clean じゃない?」と助言がありました。そこで早速先生が、「Is the Nagara River clean?」等とその使い方を対話しながらインプットしました。その生徒は、次の対話で「Because the Nagara River is very clean.」と発話できました。このように、2回の言語活動の間にある中間交流を効果的に活用していきましょう。



主体的に取り
組む態度を育
てる

家庭科編



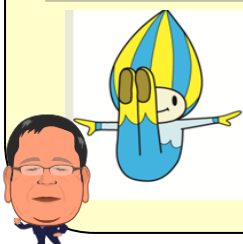
小学校第5学年「生活に役立つ物の製作」において、ミシン縫いの基本的な操作を学習する授業を参観しました。

まず児童は、前時の練習布を見ながら、改善したいことを発表しました。「縫い目が線からはみ出ているから、まっすぐに縫いたい。」「ちゃんと返し縫いを重ねて、ほつれにくくしたい。」教師は、児童が解決すべき内容を板書にまとめ、それに基づいて示範を行いました。その後、「やれそう?」と問いかけると、児童は「できそう。」「早くやりたい。」と、元気よく答えました。「では、始めるけれど、困ったときはペアの子と相談したり、先生に相談したりしてね。」という言葉で作業が始まりました。

主体的に取り組む態度を育てるために、本時解決すべきことを児童に自覚させるとともに、解決の見通しを具体的に示していました。さらに、解決に至らない場合は、助けを待つばかりでなく、ペアの仲間と話し合ったり、教師に質問したりして学んでいくことも大切にされていました。

試行錯誤しな
がら技能を高
める学習環境

保健体育科編



中学校第2学年男子のマット運動「前方倒立回転」の授業において、「体を反らして、両足で着地することをつかむ」時間を参観しました。

授業が始まると、繰り返し練習をしているのですが、うまく体を反らす感覚をつかめない生徒がいました。この生徒に、グループの仲間の一人が、「ポイントとなる『くの字』の姿勢で足を伸ばしてためを作る動き」について、示範の動画とできない生徒のマネをした動きとを比較しながら改良点を伝えていました。別の仲間の一人は、「その動きをロールマットでやってみよう。」と練習の場と方法を示していました。こうした姿は、生徒のつまずきや課題に応じて練習できる学習環境が整えられているからこそ生み出すことができるものです。生徒たちが、主体的に考え、試行錯誤しながら、技能を高めようとするのができたすばらしい実践でした。